

土 淨



正月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年四月二十八日運輸省特別授受認可（第一號）
昭和三十一年一月一日發行

第二十二卷

第一號

謹賀新年

法然上人鑽仰會

目次 (宗祖號)

新年を迎へての希望……………神居琳應(1)

佛教入門(その四)……………佐藤密雄(27)

法然上人傳……………惠谷隆戒(5)

法然上人と現代……………佐藤賢順(9)

小矢兒……………内山憲尙(14)

御忌や御忌……………戸松學瑛(18)

「法然上人全集」苦心談……………大橋俊雄(21)

童話 木魚ボクボク……………森正義(25)

梅の咲くころ……………吉田絃二郎(2)

表紙……………結城天童

新年を迎へての希望

神谷雄

舊年を送り、新年を迎へる毎に、志のあるものは、心構へを新たにして、今年こそは、幸福なる年を迎へたい。國家の興隆をも計りたい、世界の平和にも貢獻したいといふように、いろいろの希望を以て新年を迎へるのであります。これがために、新年を祝福することが、非常に意義があるのであります。特に宗教家に此の心掛けが必要です。

世界の治亂興亡を支配し得る各國の大政治家に願ひたいことは、今年こそは心を新たにして、萬國の福祉増進のために平和運動に盡して貰ひたいことである。又、我が國の政治家たる衆參兩議員諸士は、單に一黨一派の利益のみに没頭せず、國民の正しい輿論を取り入れて、國運隆昌のために盡して頂きたいことである。又、學者や、宗教家は、志を合せて、原子力の平和利用等の爲めに盡し、人生の福祉に貢獻して頂きたいことである。

特に、私の念願希望して止まざることとは、我が浄土宗の道俗全體の方々が、此の新年を迎へて氣分を轉換し、宗祖の七百五十年御忌奉修のことを考慮し、更始一新、舊態を脱皮し、宗教意識に覺醒して、浄土教大發展の爲めに盡して頂きたいことである。法然上人は不惜身命の大覺悟を以て浄土教の宣傳に終始せられました。しかも、教義の中心は、阿彌陀佛の本願力に信賴することである。此の他力に信賴する思想は、之れを反對にいへば其儘他をして自に信賴せしむることである。即ち自他信賴の思想である。彼此協力、合同一致、同入和合の大思想である。

近年、我が浄土宗内に分裂分派が起つて、此の宗教思想に幾分の危險を感じて來ました。しかし、よく検討して見れば、宗祖の教義に對して異論が起つたのではなく、分裂が生じたのでもない。單に其れを宣傳すべき方々の中に職權の爭奪が起つた爲めの分派分裂に過ぎません。宗教思想の分裂は容易に合致し得ないが、人と人との間に起るところの職權の爭奪は、時が來れば必ず一致するものであります。

社會黨は一時左右に分裂したが、一致しました。保守政黨も、民主自由と二分したが、どうやら一致しました。我が浄土宗も今年こそは心を新たにして、元の大浄土宗に還元して、宗祖の志を繼ぎ、協力一致して浄土の教義を宣傳し、成佛國土成就衆生の實を擧げ、五年後に迫れる宗祖の七百五十年御忌を盛大裡に奉修し、祖恩報答に盡して頂きたいものであります。之れが私が新年を迎へての切なる希望であり、また、浄土門徒諸士の御希望でもあらふと存じます。

梅の咲くころ

吉田 絃二郎



人間には強いところと、弱いところがある。強い心、強い信仰を持つものが救はれるということは道理にかなつて

いるが、實際は強い心の人にくらべて弱い心の人が多い。

さすれば救はれない人間が多いということになる。

法然上人はこの弱い心の人間のために八十年の生涯を

念佛を申しつゝ過ごされたのであつた。

昔から宗教の革命児というような人にはきわめて冷厳

なところがあつて、いやしくも宗門の教義に反むく者は斷乎として排し、容赦しないというきびしさがあつた。

法然上人が流されて、室の泊りに船がかりをしておら

れた時、室の遊女が小舟を近づけてきて、上人に教えを

乞うたという物語りは誰れも聞いている話であるが、そ

の時上人の遊女に説かれた救いの道がありがたい。

「あたくしは何うしたら救はれるでしょうか？」

「今のかなしいなりわいを捨てゝお念佛を唱えなさ

い。」

「只今このなりわいを捨てましては生きてゆくことができません。」

「それでは只今のなりわいをつゞけてもいいから念佛を唱えなさい。」

ありがたいのはこの點である。多くの宗教家たちであつたら、斷乎として、現在のなりわいを捨てよと命ずるにちがいない。上人は遊女の弱い心を察し、かなしい宿命を知りつくしておられた。眞理のためには身命をも惜しむなと教えるのが世間の常道であるが、捨つべき機縁に恵まれるまでは遊女のなりわいをつゞけていいと上人は説いておられる。

遊女はあまりに寛大な上人のお言葉におどろきながらえつて行つたであらう。

このことは熊谷次郎直實の場合にもそうであつた。熊

谷は腰刀を研いでから上人の前に出て救いの道を問うた。過去の戦場で數多の人を殺した直實は「先づ腕を切れ、足を斷て」といわれるにちがいないと思つて腰刀を研いだのであつたが、上人はただ「念佛を申せ」と仰せられた。熊谷はすすり上げて泣いた。

法然上人はいかなる弱い心の人間をも、佛の慈悲の網から洩らすまいというお考えから念佛の道を説かれた。

だから上人の周圍には善人もあれば惡人もあつた。上人は決して惡人と善人を差別されなかつた。また身分の上からいつても上は攝政關白から下は樵夫、草かり、茶摘み、水汲み女、漁夫、遊女、盜人などを含んでいた。

そしてこれ等の一人一人に對して、あたたかい人間的な愛情をそゝいでおられたやうに思はれる。

聖光坊がはじめて上人にまみえたのは三十六歳の時で

あり、上人はすでに六十五歳の高齢でおいでなされた。

聖光は「わが大師釋尊はたゞ法然上人なり」と、いつていたほどでいかに上人を尊敬していたかがわかる。

上人は聖光のために、日日御法談をなされたが、聖光は「毎日御法談を聴聞させていただくのはまことにありがたいが、あれでは上人さまのおからだにさわるであらう」と思い、聖光はわざと休學することがあつた。すると上人は使いをつかわし聖光坊を呼びにやられた。師弟のこまやかな情愛を察することができぬ。

「歎異鈔」のなかには親鸞の言葉として

「たとひ法然上人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさぶらう」とある。いかに親鸞が上人に對して身命を投げすてて、傾倒していたかを知ることができる。

耳四郎という盜賊は八丁へだたつた遠い話聲をも聴くことができるという男で、或る時は海賊をはたらき、攝河泉地方の人たちをふるえ上がらせたが、白川二階堂の

床下にかくれている間に、上人の法談を聴いて心を打たれ心氣一轉してお子になつた。

さらに阿波ノ介という陰陽師は、常に幾人もの美女をかかえ女を裸體にして、これをなぐり、悲鳴を聞きつゝ酒盃をあげるといふ變體的精神の所有主であつたが、上人はかれをも弟子として愛し容れられた。

他人に對しては人間の弱い心を充分に掬まれた上人は御自身に對してはきわめて強い心のお方であつた。

建永二年三月十六日、流されてゆく上人は昂然として弟子等に、一向念佛の義を説かれた。

弟子の西阿あみだ佛がおどろいて「釋尊や善導大師の御教えはその通りですが、世間の思はく、役人たちの心證もいかがと申しますので。」と上人の説法を止めさせようとした。その時の上人のお言葉はこうだつた。

「わが首を斬らるゝとも眞理を説かずにはおられぬ」
正月二十五日もやがて近づいてくる。

梅の花も咲くであらう。ゆかしい梅の香は上人の慈眼を思はせ、寒い北風に吹かれつゝ咲く姿は上人の大勇猛心を想はせる。

法然上人傳

惠 谷 隆 戒



一、閉された門

(5)

今より八・九百年も昔の比叡山や高野山は、この世ながらの極樂淨土として一般の人々に信仰されていたが、これらの山は、女人禁制の道場であつて、男はのぼることが出来ても、女はのぼることが出来なかつた。女は五障三從の罪深いものであるから、ありがたい佛法の御利益にあづかることも出来ないとされていたのである。男のみが御利益にあづかつて、女が御利益にあづかることが出来ないとは、何んと言ふ不合理なことであらうか。當時の人々には何んとしても理解の出来ないことであつた。佛教が日本に傳えられてから、すでに五・六百年もたち、奈良や京都を初めとして、日本全國至るところに

お寺が建設され、法は津々浦々にまで弘まつてゐるけれども、それは貴族の佛教であつて、庶民の佛教ではなかつた。同じように出家しても、貴族出身の僧侶は立身出世が出来るが、庶民出身の僧侶は一生涯浮ぶ瀬がなかつたのである。教は説かれていても、それはむづかしい學問であつて、無學文盲の者には、とりつくすべもなかつたのである。身分のいやしい一般庶民は、あけくれ生きんがために、喰わんがために、もたえなやみの明暮をあえてなし、人生のあらゆる煩惱懊惱に心を苦しめるばかりであつた。立派なお寺は諸所方々に建てられてあり、佛教は盛んであつても、それは一般民衆にとりては、全く閉ざされたる門であつて、人生のいろいろな問題についてもだえなやむ無産大衆にとりては、全く無用の長物

であつた。比叡山や高野山を初め、奈良の諸大寺は、權勢爭奪の道場であり、僧兵の巢窟と化して、法を説いて民衆のなやみを解決し、救いの手をのばす宗教家は、何處にもその姿を見ることが出来なかつた。都會といわず田舎といわず、至るところに、宗教を求め、道を求める聲は、みちみちていたのである。このとき岡山縣の山奥に、偶然うぶ聲をあげたのが法然上人であつて、漆間うるま時國と云う田舎武士の子として誕生されたのが、今より八百二十三年の昔であつた。

二、道を求めて

上人が九歳のとき、源内武者定明の夜襲にあい、父時國公はあえない最期をとげることになつた。幼いながらも、上人はこのとき人生の無常をつくづく感じられたことである。別して父の遺言として、「汝はさらに會稽の耻をそぞろと思つてはならない。早く出家して父の菩提をとむらい、みづからのさとりを求めよ」とさとされた言葉は、上人の心の中に深くきざみこまれて、日夜忘れることが出来なかつた。まもなく十三歳の年をむかえ、母に別れをつけて、道を求めるために京都にのぼり、比叡山に教えの師匠を訪ねることになつたが、學問は日に月に進み、すでに十八歳のときには、一通りの學問が出来あがつたのである。そこで父の遺言を完うすべく、

師匠に別れをつけて、比叡山西塔北谷にある靜寂な境地、黒谷に身をかくして、靜かに道を求める修行に精根をなげうつことになつた。この頃天下は源氏と平家とに別かれ、勢力興亡を争うはげしい戰亂がつづき、かの有名な保元、平治の大亂が相ついで起り、人倫はすたれ、世の中は麻の如くに亂れたときであつた。いたるところに、恐しい地獄の姿がくりひろげられ、救いを求め、宗教を求める聲は天下にみなぎつていた。この姿を目のあたりに見られた上人の、道を求める熱意は一層盛りあがつてくるのであつた。ついにこの心は、上人をして比叡山を下り、嵯峨の釋迦堂へ參籠せしめることになり、さらに京都や奈良の諸大寺に、智者學者を訪れ、教を求めることになつたのである。しかし、誰をたづねても上人の心をみたす教えはみつからなかつた。止むをえず、なげきなげき比叡山に歸り、黒谷の報恩藏と云う、一切經の納めてある藏にとじこもり、寢食を忘れて研究三昧にはいられることになつた。十八のとき黒谷に身をかくしてより四十三歳のときまで、實に二十五年の永い間、一切經の研究に没頭された結果、ついに支那の善導大師の書物を見ることによつて、初めて上人の心をみたす、尊い教を發見されたのである。それは如來の本願を信じ、念佛すれば必ず救われると云う、如何なる人でもたやすく往生することが出来る教えであつた。

三、開かれた門

上人が淨土宗を開かれたのは、承安五年の春三月、四十三歳の年であつた。永い間の修業がむくわれて、修しやすく、行じやすい念佛の門はついに開かれたのである。

上人は山を下りて京都に出で、西山の廣谷、加茂のかわら屋や、東山の吉水の草庵に住まいせられて、念佛の教を弘められることになつたのである。その頃は、源平の戦亂の最もはげしいときであつて、おごる平家は都をおちて、兵庫の福原や讃岐の屋島に逃れ、ついに下關の檀の浦のもくづと消えて亡んでしまい、源氏が天下を治めることになつた頃であつた。祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきありとは、平家物語の作者ならずとも、その當時の人々が、痛切に身をもつて感じたことである。戦に勝つた者も、負けた者も、ひとしく世の無常を感じ、心のやすらぎを失い、身のおきどころに苦しみ惱んでいるときであつた。従つて、上人の念佛の教が開かれるや飛ぶ鳥も落す勢いの榮花をほこつた平家の公達も、鬼おもひしぐ一騎當千の源氏の武將も、生者必滅、會者定離のおきてを身をもつて味い、上人の草庵をおとづれて教を乞う者が市の如くはせ參じたのも理の當然であらう。

上人の教は、生れつきのままにて念佛する教であつて、悪人は悪人ながら念佛し、善人は善人ながら念佛し、智

慧ある者も、智慧なき者も、男も女も、年寄りも子供も各生れつきのままにて念佛することによりて淨土に往生する、いわゆる萬機普益の教であつた。あるとき上人が大阪の四天王寺に滞在しておられた頃、高野山の明遍僧都と云う三論宗の大學者が、一日上人をおとづれて、初對面の挨拶もしないで、いきなり「このたびいかがして生死をはなれ候べき」とたづねると、「南無阿彌陀佛と唱えて往生をとぐるにはしかずとこそ存じ候へ」と上人が答えられた。すると僧都は、「たれもさは見をよびて侍り、ただし念佛のとき心の散亂し、妄念のおこり候をばいかがし候べき」と質問し、上人は「煩惱具足の凡夫、いかでか妄念をとどむべき。その條は源空もちからをよび候はず。心はちりみだれ、妄念はきをひおこるといへども、口に名號をとなへば、彌陀の願力に乗じて、決定往生すべし」と答えられたことは有名な問答であつて、上人の教は、煩惱妄念の起る中から、南無阿彌陀佛と佛のみ名を唱えることによつて、淨土に往生することを得るとする點に特色をもつものである。

四、配所の月

上人の念佛の教が弘まれば弘まるだけ、比叡山や奈良の大寺院から、猛烈な反對運動が起つて來た。ときたまたま、上人の門弟住蓮、安樂の二人が御所の女房を剃髪

したことに端を發し、後鳥羽天皇のおいかりにふれて、建永二年の二月、藤井の元彦と云う罪名を受け、上人七十五歳の老體の身をもつて土佐の國へ流し人にされることになつた。このとき、門弟の中には、上人にしばらく念佛を弘めることをやめられては如何であるかと諫言するものもあつたが、上人はたとえ死刑におこなわることあるとも、念佛の教を弘めずにはおかまいと云う固い決意のもとに、承元元年の三月十六日に、小松谷の禪房をあとにして、配所へおもむかれることになつた。鳥羽の港から川舟に乗り、淀川を下つて攝津の經が島につき、播州の高砂、室の泊をへて鹽飽島に着き、さらに讃岐國に上陸して配所の月をながめること八ヶ月、その間、田夫野人をすすめて念佛を唱えしめ、承元元年十二月八日勅免の宣旨が下つて配所を旅立つて歸落の途につかれたのであるけれども、なお京都に歸えることを許されなかつたので、止むをえず攝津の勝尾寺に四ヶ年間滯留せられることになつた。いつしか時うつり、星かわりて、建暦元年の十一月十七日に、京都に歸つてもよいと云う宣旨が下つたので、上人は七十九歳の老體をもつて、諸弟子にまもられて京都へ歸えられることになつた。

五、吉水のいほり

上人が都に歸られたとき世は、すでに吉水の草庵は、比

叡山の山法師のために破壊されて、跡かたもなくなつていたそこで栗田の青蓮院の慈鎮和尚が、あまりにも氣の毒な姿をながめて、境内にある吉水の禪房の一寓を上人に提供して、そこに上人を迎え入れることになつた。ところが、何分にも七十九歳の老體の身をもつて旅をつづけ、しかも寒さのおりから、旅のつかれも手傳つてか、風邪が元となつて病の床につかれることになつた。翌建暦二年の正月元日から病床にふしたまま起きることも出来なくなり、食事も次第に進まないようになると共に、からだもだんだん衰弱してこられた。そこで門弟たちは、上人の御往生の近づいたことを知り、上足の法蓮房信空は、上人の枕邊に近よつて尋ねて云うに、御往生の後、いづくを上人の御遺跡とすべきであるかと云うと、上人答えて、「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆへいかなとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」と云う尊い遺誡をあたえられ、正月二十三日には、勢觀房源智の求めに應じて、「一枚起遺文」を記して末代の龜鑑にそなえ、正月二十五日に八十歳を一期として正念往生の素懷をとげられたのである。

法然上人と現代

佐藤賢順

時と人

いつであつたか、朝のラジオで作家の中河與一氏が、法然と親鸞の人間探求の話をして、これほどに深い人間の把握はどこにもないという意味のことを語っていた。何氣なく中河氏の話聞いていた私は、この一段に至つて、聞き耳を立てた。やはりほんとうの自己探求をやっている人達には、法然、親鸞の人間探求の意義とその深さがわかるのである。

(9)
ありのままの人間の見定めから、ほんとうの宗教生活は始まつている。かつて教えられた通りの人間の考え方を、

もう一度考え直して人間の眞の姿を見直すことから、ほんとうに自分のものとなつた宗教生活が始まるのである。

人間が自己を反省してその本姿を把握するには、今この私が置かれている場所、私が今立つている時代、についての意識をはつきりさせなければならぬ。時代感覚の上から自己を批判しなければならぬ。そこには一種の宿命観のような、「どうにもならないこの自分」というはかなさとともに、釋尊の在した頃のような、正しく美しく圓らかであつた時から遠ざかつてくるに従つて、ますます悪くなつていく世の中、追いつめられていくような歴史、についての歴史批判がなくてはならない。法然上人が浄土宗を開い

たのは、こういうのはつきりした時代意識、その頃の言葉でいう末法意識をしつかりとつかんだ上で、人間の姿を追求したのである。「朝にも夕にも營むことは名聞、昨日も今日も求めるものは利養。」このようなどうにもならない自己であつた。「智慧の眼、盲い、行法の足、なえたるこの頃のわれら」であつた。「罪重くして無知の者」であつた。

昨夜、私は或る禪師と話し合つた。この人は風貌といい舉措動靜といい今に古風を傳えた珍らしい代表的な禪家の一人であらう。しかしその大言壯語に似た話し振りや、隨所に主となる的な考え方には、何かしら空ろな淋しさがあつた。何かしら本物を離れた浮わつた調子があつた。カラカラカラ風の笑聲も、この人に適應しい自然なものに思えたが、何となくあとに白けた餘韻が残つた。

現代は法然上人の頃に比べて、末法の意識はもつともつと切實である。「どうにもならないこの自分」という頼りなさは、上人の時代どころの比ではない。學生はラジオをかけながら飯を食いながら本を讀んでいる。それでいてラジオを聞いているわけでもなく、飯の味がわかつているわけでもなく、勿論、本に書いてあることが十分理解されているわけでもない。しかし落ちついてラジオだけをきく、飯だけを食う、本だけを讀む、ということができないのである。萬事がそうである。精神分裂症とノイローゼの時代で

ある。

人間は人間自らを分析し探求し批判しようとする不思議な性質を與えられている。そしてこの自己探求は、いずれの時代にも止んだことがない。現代の實存主義の文學や哲學は、どうにもならないこの自己の、現代における自己把握である。法然の人間觀こそ時代に何か光をかけるに違いない。

佛の本願

去る十一月中旬、銀座松屋で開かれた繪卷物名作展は近來にない素晴らしい展觀であつた。博物館の金子良運氏に「今年開かれた展觀のうちで一番見てたえのある催しです是非見ておきなさい」といわれて、觀に行つた。なるほど名寶繪卷が數々展げられていて、どれも興味の深いものであつたし、繪卷というものは、その頃の人達の私生活を覗かせるという秘かな興味も手傳つて、時の經つのを忘れたが、數々の繪卷の中でも特に感銘の深かつたのは、一遍聖人繪傳と増上寺の法然上人繪傳（二卷傳）であつた。特に後者からは實に深い感銘を受け、或る場面では、昂奮に似た感激に打たれて、立去りがたいほどであつた。智恩院の四十八卷傳に比べると、僅か二卷であるが、その繪は素朴で枯淡で、さりげなく書いたその巧まざる素朴さが、いか

にも眞實を描いているようであつた。そのうちの一段に、上人が阿彌陀三尊を感じせられた圖があつて、特に私を惹きつけた。四十八卷傳ではこれに當る場面はいわゆる三昧發得の一段で立派な僧庵や極樂の莊嚴など構圖がすつかり作り上げられていて、却つてそらぞらしい。それに比してこの繪は山間の淋しい場所で、山を背にして、ほんの堀つ立て小屋のような庵を結び、木皮葺きの屋根には、風に飛ばされぬための石が置かれている。せいぜい三疊一間位の庵であつて、一基の經机の他は何物も調度はない。うしろの厨には今、炊しいだばかりの鍋や櫃が雜然と置いてある。上人は庭に面して珠數をくつておられるが、庭の中ほどには、阿彌陀、觀音、勢至の三尊が、來迎の姿で雲に乗つて宙に浮いて影現し給うている。何んとなく自然で、ありそうなことに思える。詞書きには、

上人、ある夕ぐれのことなるに、ひろえんに向い念佛して有りけるに、彌陀の三尊、繪像にも木像にもあらず、垣を離れて天にもつかず地にもつかずして在しましける。その後、拜見したまい、御ことばをかわしたまうこと度々なりけり。

とある。

上人ほどの人であれば、しばしば佛と言葉を交わしたということも本當に違いない。われわれの知性ではとうてい

判斷のできない靈性でのことであり、感性界を超えた叡智界の事柄である。佛とか如來とかいわれるのは、世に満ち満ちる救済の働きかけ、慈愛のことである。佛の當體は本願である。本願ということは、淨土教の信仰の中核をなしている。

阿彌陀佛がまだ佛とならなかつた昔、法藏比丘と名のつた。法藏は衆生救済のために發願して理想國土を作ろうとした。そしてその時、世に在した佛、世自在王佛のもとへ行つて、この決意を打開けた。世自在王佛は多くの理想國土の實相をまのあたり見せてくれた。淨土のモデルケースを示してくれたわけである。それらの國土を見て、法藏比丘は長い間考えた結果、四十八カ條の誓約を立てた。それが本願である。そしてその誓約を悉く果して、理想國土、西方淨土を建立し、今現にその教主となつておられる。四十八カ條の約束の中では、第十八條の「もし衆生が救いを求めて心から我が名を呼ぶならば、必ず救い」とつてこの國に生れさせ、最高の覺りに至らせてやろう」という誓約が最も重要な誓約で、佛の本願はこのうちに結晶されているとするのである。我が名を呼ぶ——阿彌陀佛の名を呼ぶ、それが念佛、南無阿彌陀佛である。佛は南無阿彌陀佛を稱える者を、必ず救い」とつて淨土に生れさせてくださる。絶えず働きかけてくる救いの慈悲、これが本願である。

この物語は實際に歴史上にあつた物語だと思つてはいけない。歴史上の出来事だと考えるから、本願は知性で理解できぬただの寓話になつてしまつて、せいぜい暗愚な者達を誘うための方便だとされてしまう。また、それはただの構想、フィクション、藝術家が勝手に考え出したシナリオ、だなどと考へてもいけない。それは物語の形をしているけれどもただ物語ではなく、藝術家の空想力が勝手に作り出したシナリオではない。本願は人間的な知性や空想や情念の世界ではない。靈性の出来事である。大生命そのものの働きであるところの絶對の慈愛が、かりに形を整えて法藏比丘の誓いとして、感得せられ表現せられたのである。それは生命であり、光明であり、智慧であり、とりわけて絶對愛である佛そのものが、最も具對的に表現せられた姿である。佛が在すのは西方だけではない、本堂の正面だけではない、佛壇の中だけではないお墓の下だけではない、佛は盡十方無礙光如來という名の示す如く、どこにでも救いの力として、満ち満ちている。

現代の中年以下の人々は、ヒューマニズムだけの畑で育ちすぎてしまつたので、超ヒューマニズムを知らない。人間的な知性や情念の立場で物を見ることは知つてゐるがそれを超えた、しかも無限に廣い立場があることを氣ずかない。これは現代の最惡の不幸である。

極樂淨土

盛岡の市民講座へ出講した歸り途、平泉の中尊寺の金色

堂へ參詣する機會を得た。東北への旅行の度ごとに、見學を思い立つのであつたが、いつも何かの事情でそれができなかったなかつた金色堂へ參詣したいという希望は、この遺構



が九百年も前に藤原清衡、基衡、秀衡三代がその財力を傾けて造り上げた、東北地方に残る随一の文化財であるという理由からばかりではない。も一つの理由は、法然上人の弟子、阿波之介が金色堂のほとりに葬られている、と聞いているので、そこへ一度参詣したいと思つていたからである。阿波之介は法然の在俗の弟子の中では、人の良い温しい正直な男であつたが、學問も教養もなかつたので、愚か者の代表者のようにいわれている。上人が「阿波之介が申す念佛も私が申す念佛も更に差別がない」といわれて、智者も愚者も、善人も悪人も區別がなく、念佛する者は等しく如來のお救いを頂けると説かれるときの、愚者の實例とされたことは周知知られている。どうして阿波之介がこの東北の地までやつてきて、こゝで終つたかについては、傳説以外には、確かな史實はない。

九月の初旬であつたがみちのくはもう秋であつた。行つてみると、なるほど阿波之介の墓は、金色堂のほとりにあつて、堂守か番人かのように堂を見守つている。金色堂に詣でる人は一日に何百人あつても、この墓の前に立つ人は数えるほどもないであらう。

金色堂は今は覆堂さやどうで覆われているが建立當時は、内外ともに金箔を押し、屋根瓦までが木製で金箔を押しであつたから(その一部が現存している)、金色燦然として、目もま

ばゆいばかりであつたに違いない。堂内には佛師定朝作の阿彌陀三尊が安置され、柱には漆地に蒔繪や螺鈿らでんで佛像や寶相華が描かれ、格天井こうてんじやうに、須彌壇の格狭間こうさまに、當時の工藝の粋が集められるなど、さながら極樂淨土の再現であつた。金色堂はそのまま極樂淨土であつた。藤原清衡など三代の遺骸は棺に納められて、この内陣の須彌壇の下に埋藏されているが、それは此處こそ極樂淨土であると信じられたからである。京都からはるばる陸奥の中尊寺まで辿りつた阿波之介は、この世ながらの淨土を見て、此處こそ往生の地と思い定めたのであらう。そして日々の念佛稱名を勵みながら、生涯を金色堂に奉仕したのであらう。

近くには二代基衡の造立した毛越寺もうごうじがあつて、そこにはお經に書いてある通りの極樂の池があつた。そして白い蓮紅の蓮の咲き亂れる間を、人々は龍頭鰐首りゅうとうゐしゅの船を浮べて楽しんだのである。この世における淨土の影現である。

現代の人はこの世をそのまま極樂淨土として安住するほどに素朴でもなくその餘裕もない。そうかといつて未來の國、死後の世界の實在を信することはなお更できない。現在に續く未來に、淨土の存在することを信ずる人は、今では、稀なのではないか。大ていの方は、すべて人世の問題

小矢兒

内山憲尚

「夜討ちだ！」

「起ろ……起ろ！」

勢至丸は小さい枕に半ば顔をうづめて、すやすやと夢路をたどつていました。

馬のいななき、ひづめの音、わつと言うさけび聲は次第に近づいてきます。

保延七年三月十九日の眞夜中です。押領使漆の時國の館へ夜討ちをかけたのは、平素漆の時國を心よからず思つてゐる、堂庄預所明石の源内武者定明で、家の子郎黨五十餘

人を引きつれて、不意討ちを行つたのであります。

時國の館では何の準備もない所へだしぬけの攻め込みでありますから、うろたえさわぎ、寢卷のまゝに弓をとるもの素足のまゝかけ出すもの、女や子供は泣き叫んで逃げ出して行く騒ぎです。

時國公も着物を着替える暇もなく、寢卷のまゝ刀を取つて出向いました。敵の射出す矢は雨の如くに降つて來て、正面からは切り込むことも出来ない始末です。

あまりの騒がしさに、目を醒した勢至丸は、表の騒ぎに耳を立てました。夜討ちだということがわかれると、帶をし

め直して立ち上りました。

いつも裏の松の木のとこで稽古している小さい弓と矢を左手に持ちますと、いきなり座敷の横の雨戸をくぐつて廊下へとび出しました。九歳になつたばかりの勢至丸ですが、他の子供とちがつて、どこかしつかりしたところがあるばかりではなく、夜討ちの勢にも少しのおそれる様子もなく、落ちつき拂つて、ざわめいて押しよせて来る敵の方をじつと見つめました。

「もの共。それ切り込め！何をぐづぐづしているか。……切り込むんだ！」

大きな聲をはり上げて小高い築山の中央に立つて一同を指圖しているのは、敵の大將源内武者定明です。黒色おどしの鎧に同じ黒色の兜をいただき、手には采配を持つて、底光りのする、鋭い眼であたりを見渡し乍らどなりちらしています。

勢至丸は『あれが夜討ちの大將だな』と思いますと、にくしみが、ぐつと胸にこみ上げて來ました。いきなり左手に弓の中程をにぎると、矢をつがえきりきりと引きしぼりました。眉間のところにねらいをつけました。満月のようにしぼつた弓は『えい！』という掛け聲と共に弓のつるを離れました。

采配をふり上げた定明の左の眼と眉の間にすばりと命中

いたしました。

「わあ……」

定明は思わず倒れそうになりましたが、やつと身體を持ち直し、左手で小矢を引きぬきました。小さい矢でしたから命には別條はありませんでしたが、流れ出る血が眼に入りそうなので、疵口を押えたまま引き上げてしまいました。

これはずつと後のことですが、小さい子供乍ら落ちついた態度といい、その勇ましく、大膽な、しかも弓の上手さに村の人たちは感心をして、勢至丸のことを小矢兒とほめて呼んだのでありました。

潮の引くように定明の兵が引きあげた後は、静まりかえつた漆家の館は霞にとざされて、音一つ聞えませんが、

奥の部屋にはたくさんの矢の傷や刀傷をうけた時國が、白い蒲團の中に苦しそうな息づかいをして寝ています。

「お苦しいございますか……」

おつきの者が心配そうに、聲をかけますが、それには何の返事もせず、ただ眼をふかく閉ぢているばかりです。

「只今、醫者を迎えに參りました、しばらく御辛棒下さいませ」

「……」

「いかがでござりまするか」

「……」

この苦しそうな様子をじつと見ていた勢至丸は、膝を進めて、時國の枕もとへ近づきました。

「お父様、苦しうございますか……お父様この仇はきつと私が討ちますから……」

この言著がまだ終らないうちに、時國は頭を持ち上げてじつと勢至丸の顔をながめ乍ら苦しい息の下から、とぎれとぎれにいいました。

「お前がお父様のことを思つて言つてくれるその言葉はありがたい……よく考へて見ればこれというのも平素から定明と仲が悪く、くだらぬ争をしたことがつもりつもつてこの仕末……今更ら誰を恨むこともない、お父様にもいたらぬことがあつたのだ……佛教で言う前世の宿業というものかも知れない……」

時國は息を休みながら、又苦しい言葉をつぎました。

「お前が、父の仇を討つといつてくれたが、お前が定明を親の仇とうらんで討てば、今度は定明の子供がお前を親の仇とつけねらうことだろう……そうしていれば、いつまでも互に恨の晴れることがない。ほんとに浅ましいことだ。」

時國の聲は細くなりました。

「お前がわたしのことを思つてくれるのなら仇討ちはやめて、出家をして佛門に入り私の菩提を弔うてくれ……それ

が何よりも私のために……よいか……わかつたか……」

「はい、お父様、よくわかりました。今のお父様のお言葉を守つて、立派なお坊様になつてお父様の菩提を弔います、どうか安心して下さい……」

「勢至……ありがとう……」

「お父様……」

時國はさも安心をしたように手を合せて、静かに眼をとちてしまいました。

「お父様……勢至はきつとお言葉を守ります——お父様。」

昨日までは一家たのしい家庭でありましたが、急に淋しくなりました。涙ながらに、お葬式をすまし、七日七日の中陰の法事もすみました。

勢至丸は、お母様にたのみました。

「お母様お願いでございます」

「お願とは」

「お父様との約束です、私をお寺へあげて下さい」

「佛教の勉強はなかなか苦しくてつらいものです、もう少し大きくなつてからにしてはどうですか」

「どんな苦しいことでも、つらいことでも、きつと辛棒して立派にやります。お父様との約束を一日も早くはたした

「と思いますからどうか今すぐにやつて下さい」

あまりたのみますので、お母様もとうとう決心をしてお寺へ上ることにしました。

お母様の弟に當る觀覺得業という菩提寺の御住職にたのんで、そのお弟子にしてもらうことになりました。

小さい乍らも勢至丸は一生懸命に勉強をしました、その上生れつき大變賢い子供でありましたから師匠の觀覺得業もおどろく程の進歩で、一度教えたことは決して忘れず一を聞いて十を知るといふ言葉がありますが、ほんとうにその通りの神童でありました。

勢至丸が十五になつた時、

「お前には大體教えることも一通り教えたしこんな田舎で勉強していても張り合いもない、都へ上り叡山へ行つてほんとうの勉強をして來たらどうだね」

と申されました。

「はい、ありがとうございます。お母様のお許さえごさいますれば……」

觀覺得業は勢至丸をつれて、お母様のところへ來て許を受けました。

「お母様、それでは行つて参ります」

「勢至や、身體に氣をつけてね」

「はい、お母様もお體御大切に……」

「しつかり勉強するんですよ」

「はい、お父様のお言葉を忘れず、一生懸命勉強をして、立派なものになります」

「ではさようなら……」

「お母様、さようなら」

久安三年の春、櫻の花がちらちらして散りはじめた頃です。十五年の長い間自分を育てていただいたなつかしい母や家の人たちに別れ、春夏秋冬美しい自然に親しんで來た稻岡の里に名残りをおしみ乍ら、京の都へ向つてただ一人旅立つて行きました。

お父様の言葉を守つて出家した勢至丸は、比叡山の持寶房源光上人の許に弟子入りしましたが、それから更に當時叡山第一の名僧と言われた功德院の皇圓阿闍梨の許に入り勉強に勉強を重ねて終に法然房源空と名乗られて、淨土宗の教をお聞き下されたのであります。

法然上人のお生れになつた岡山縣の久米の南條——今日そこには誕生寺という大きなお寺が建つて、法然上人のお徳をしたつています。

(駒大講師)

御忌や

御忌

戸松學瑛

一、庶民の御忌

月かげの、いたらぬ里は、なけれども
ながむる、人の心にぞ、す——む……

と、なだらかな、御詠歌のうた聲が、三門のかなたから
きこえてくる。チャリン、チャラン、警蹕の音が響いて
くる。六金色の旗、色衣金襴の僧、朱傘をかざして今日
の大導師は、静々と木履の歩をおすすめになる。花にま
ごう稚兒天童は嬉々として、にぎやかに、あとや先、繪
卷のような行列はくる。沿道と言はず、境内といはず人
の山、人の波、かくてお練りの列は仰ぎ見る大本堂に進
む。折柄、樂の音妙へに、天鼓鳴る。堂内立錫の餘地も
なく、念佛の聲は湧く。香の煙、立ちのぼるところ、一
段高く須彌壇上、黒衣、大師衣のわが大師法然上人はお
はします。歎徳諷誦の聲も一しきりさえて、善男善女は
歸依の掌を合はせ、念佛の聲、堂の外にみちあふれる。
ナム、元祖圓光、東漸、慧成、弘覺、慈教、明照大
師、御忌日上酬慈恩……
大導師の發聲に和した唱禮のとなえありがたく、満坐の
面々、感涙を催して往時を追想し、ひたすらなる渴仰の

姿、見る目も殊勝の至りであります。

これはこれ陽春四月、八重櫻匂う芝山内、大本山増上寺、御忌會の風光であります。申すまでもなく、わが法然上人、御入滅の忌日は、建曆二年正月廿五日であり、御祥月は一月廿五日であります。それ故正月廿五日を御忌にちと申し、各本山は固より諸國諸州、くまなく追恩の御法要をおつとめして居る次第であります。

二、勅會の御忌

法烈上人の御法要を古來御忌と申して居り世人も亦その通り申し傳えて不思議とも何とも思つて居りません。それどころか、俳句の季題にもなつて居る位であります。一體、御忌と言う言葉は、もともと、天皇、皇后の御忌日に限り用いられる言葉であり、民間人の使用することの出来ない性質のものであります。それを法然上人にかぎつて、御忌、御忌と當りまへのように申して憚らないのは大きにその理由があるからであります。

その由來を尋ねれば、法然上人の滅後三百十三年、後柏原天皇の大永四年正月十八日、御廟所のある知恩院の住持超譽上人に對し、次のような鳳詔が宣下されたこと

に因るのであります。

朕聞々、流派をくむ者は、はるかにその源を尋ね、枝葉を愛する者は力をその根に培ふ。蓋し知恩教院は淨宗創業の道場、祖師入滅の靈跡、遺教四内に布き、屬刹國中に徧ねし。苟もその末流たる者は寧ぞ本源を忘るべけんや。自今以後、孟春の月に遇へば、宜しく京畿の門葉を集會し、一七日晝夜、法然上人の御忌を修すべきなり。追遠の誼想、かくの如くにすべし。故に茲に詔じて示す。宜しく知悉すべし。

勅會の御法要は、さぞ立派であつたでありましょう。宜下に基づいた毎月の御法儀は、こゝに永代の式典となり叙信に奉答して天下の御忌と相成つた次第であります。

御忌の鐘、響くや谷の水まで（蕪村）

東山卅六峰、峰谷々の底の底まで響く鐘の聲、洛中洛外、おのぼりさんも、なつかしげに耳傾ける梵鐘の音、

下京をはなれて聞くや御忌の鐘（司水）

三、天下の御忌

ところが、明治維新後は、御忌の期間を、毎歲四月十九日から七日間修行することに改められて今日に及んで

居ります。時恰も櫻花らんまんの候、花吹雪を浴びて、數珠つまぐる善男女の殊勝さよ、京女のみめのよさよ。老若男女、智愚賢不肖のわかちなく、念佛一色に、色どられ、千年の舊都は、さながら安養淨土の景觀を呈す。

世にさかる花にも、念佛申しけり（芭蕉）

都の春と御忌日和、いかにもよく調和してゐるではありませんか。それもその筈、法然上人御臨終のみぎり『孝養のために精舎建立のいとなみをなすことなかれ、心ざしあらば、をのをの群集せず、念佛して恩を報ずべし』と御遺言されて居りますが、さてそれでは、情に於て到底忍ぶことができず、御入滅直後、七七日の御中陰法要は申すまでもなく、時がたてばたつほど追慕の情いや増して、都も鄙も、おしなべて、われもわれもと、御忌にちの法要を修したことであります。

さる程に、念佛の聲天聽に達し、宗祖の御徳、叡慮にかなひ、滅後四百八十六年、元祿十年正月十八日、東山天皇は、畏くも、圓光大師の諡號を宣下せられました、以後五十年毎の御忌には、時の御門から加謚の御沙汰を拜して居ります。東漸大師、慧成大師、弘覺大師、慈教大師、そして又明治四十四年七百回の御忌に丁り、明治

大帝から明照大師の號を頂戴いたしました。尊慮もさることながら、祖徳深遠たゞたゞ感銘の極みではありませんか。來る昭和三十六年は、正しく七百五十回の御忌に相當いたします。吉水の流れをくむ道俗、果して何を以て祖恩に應え奉らんとするか。（前東京教務所長）

（十三頁より續く）

は墓場の手前で片すけてしまおうとしている。

では淨土とはどこにあるのか。法然上人は、「三界を出す」ことが淨土に生れることであると述べている。三界とは欲望の世界・物質の世界・觀念の世界であるから、この現實の世界、人間的な世界のことである。であるから、三界を超えた世界とは人間の知性や感覺を超えた世界、人間的な限定である過去や現在や未來を超えた超時間の世界、知性や感性の世界でなく靈性の世界のことである。

淨土は願心の所入であるといわれる。願心とは先に述べた絶對の慈愛である。この人間的な愛欲を超えた絶對愛の世界が淨土である。どうにもならないこの自分が、佛の絶對の慈愛に包まれて育くまれて生きるところに、宗教生活は開けてくる。

（大正大學教授）

「法然上人全集」苦心談

大橋 俊 雄

昭和二十五年の初秋、そよ風のたちこめる頃、「選擇集の研究」を終へた石井博士は、元祖教學の思想史的研究の必要性を説かれ、元祖の信仰が例へゆるぎないものであつても、思想には變化があつてもよい筈であるし、又そうなければならぬ。事實その著に當つて見ると、思想には三轉の跡が見られるようである。此れからは共同して、此の研究は進めようではないかと申された事があつた。併しそれには、其れを研究するに必要な資料をととのへなければならぬ。こんな事から話ははずんで、「それでは新らしい編集法をとり、思想史的研究の成果をおりこんで、七百五十年遠忌を目標に法然上人全集をつくらうではありませんか」と、私は乗り氣になつて話を

すすめた所、先生も「君が助力してくれれば」とのことと、話はとん／＼拍子に進んだ。東船堀の假寓に先生が居られた時の事である。そして資料の蒐集と校合を始めたのは、學校も冬季休暇に入り、暮もおしつまつた頃であつた。

しかし手近にあるものから、愈々校合を始めて見ると、一大障壁にぶつかつた。それは原本に當らなければならぬと云うことである。淨嚴院の好意によつて借用することの出来た無縁集を、伊藤祐晃氏の「淨土宗史の研究」に收めたものと比較して見ると、それは同一でなければならぬ筈であるが、いざ校合して見ると大分相異があるのに驚き、此の上は全部に亘つて一應正確に校合したものと

云はれているものでも、一度些細に校合して見なくては信用が置かれぬと心に誓つたのであつた。例えば元享版の和語燈錄にしても、其れを正しく履刻したと云う檀王本と眞宗聖教全書本とを見較られば少異ないとはせず、その異なりは假名遣いに於て甚だしいように見受けられた。校合は原本に忠實でなければならぬ。校合は簡単に出来、機械的に成し遂げられるように斯業にたずさわつたことのない人は考えられているようであるが、そんな悠長なものではない。一字一劃を正確に見つめ、「い」と「ゐ」「ひ」という細かなものであつても、決して見通すわけには行かない。宗學者としての立場からは、例えそれは許されるとしても、言語學者の立場からはゆるがせには出来ない筈である。校合本によつて相異がある場合、その變移の中には時代性が潜在しているであろうし、古學古語も含まれていてあるであろうことを考へて見ると、校合は並大抵の勞苦ではなく、一日たつても仕事は遅々としてはかどりはしない。加うるに活字を見つめる私の眼は赤ばつたく張れ上る。此頃から學校に教鞭をとる私は、學校の仕事と家の仕事を判つきりと切り離して考へた。家庭を學校の延長とは考へず、與へられ

た學校の仕事は、いくら遅くなつても學校でやりのけた。従つて家は法然全集の編集に専念する研究室であつて、私の腦中には法然全集の外には何もものもなかつた。朝は四時に起床して登校の七時まで、夕方は六時から十一時まで、此れが全集編纂のために捧げた時間であつたが、それでも校合と原稿は遅々として進まず、一日僅か二百詰原稿用紙にして五枚程しか成らず、前途の長きを歎息するばかりであつた。朝に夕にみ佛の前に合掌し、念佛の精進をつづける私は、其の成就を阿彌陀如來におすがりし、大成を祈るのであつた。全く月月火水木金金の生活が四とせ半ばかりつづき、炎暑に汗をのこい、寒冷に何時かインクが凍るといふようなことも幾日であつたらうか。疲勞に肝臟をおそわれ、病床に呻吟した數日を除いては全力をこれに傾けた。

そして閑さへあれば、古きみ寺の門をたたいて法然上人の遺文を求めた。しかしそれを得られないままに、空しく山門を後にしたことも幾度びか。元祖上人の「昨日モイタズラニクレヌ、今日モ又ムナシクアケヌ、イタタビカクラシ、イタタビカアカサントスル」の文をつくづく味はつたのも此頃であつた。なぐさめるに人なく、はえのない研究を、人

は物好きののやつている仕事としか理解して居らぬらしい。玆で志を挫折するのもと、發奮しているうちに、月日は何時の間にか四歳を過ぎていた。

ここ數年間、毎歲八月中旬から下旬にかけてよく旅をつづけた。法然上人關係のものが展覧されると聞いては、じつとしてゐることも出來ずに旅立つたことも、何回か知れない。京都博物館に西大寺舊藏本法然上人傳法繪を拜觀し、知恩院での秘寶公開大展に態々足を運んだのも、其の至ては全集を編纂するため資料蒐集の旅であつた。法然上人の眞蹟と傳えられるものは極めて少ない。嵯峨清涼寺所藏の熊谷直實入道に宛てた消息も、一部に眞宰と認める學者があるとは云へ、否定する人がないでもない。一心寺の一行一筆阿彌陀經にしても既に疑がもたれ、當時高野あたりにも源空と名乗る人がいたことは事實であるから、源空と署名する者が全て法然房源空であつたと誰が斷定することができらうであらうか。まして上人は、「文章ヲ善クセズ、仍テ自製之書記無シ」と明恵が述べてゐる所を信據するならば、眞筆本を残さなかつたのも當然かも知れない。現在確實なものと自他共に認めてゐるのは、慮山寺本選擇集の題愈以下二

十一字と七箇條起請文に認められた署名だけであるが、上人にして若し親鸞や日蓮の如き多數の典籍を残して居れば、それを以て底本とすることも可能であるが、元祖の場合はそれも出來ない。玆に又、全集編集の上に底本を設定する苦心があつたのである。異本類本の數多存する場合、是非共拜覽し、而して後嚴密な校訂を施すのが學徒に與へられた使命である。二本以上ある場合、それがなされなかつたならば、最早や其の價值は半減したと云つても過言ではなからう。かかる謗りを受けないようにするためにも、出來得る限り異本を見出し校合せねばならない。龍谷大學の平春生教授や小島文保氏の手を煩はして、態に夏季休館中の圖書館の開館を願ひ、大谷大學に偶々岐阜に歸省中の大宰不二丸教授の上洛を請ひ、圖書閱覽の便宜を與へられて、資料の所在を「眞宗聖教現存目錄」と共に、教示していただいたのも、古寫古刊本を知るための胎動にしかすぎなかつた。そこで見出し得たというよりも、發見したと云つた方があてはまるであらう資料を見つけた時の喜び。大谷大學の如き餘りにも圖書が多いのに反して、圖書館は陝隘を告げ、棚に廊下にと積み重ねられて充分整理されてない書庫から、法

然上人關係の遺文ならんと、大宰教授に出して戴いた時の、先生の勞苦は察するに餘りあるけれども、遂に求め得た時の喜びは、全く歡喜にみちたそのものであつた。こうした一春一夏の旅で遺文は可成りに集まり、次の旅までの間に此れを整理せねばならず、まま不明の個所がある時は、又原本に求めて正さなければならなかつた。法然全集を介して、禿氏・宮崎・大友・石田等多くの眞宗學匠の知遇を受け、そして諸教授は全集進捗の上にも陰に陽に援助を惜まれなかつた。

瓜連常福寺に旅したのは、確か廿七年の秋未だ淨土宗全書の編集に助力を傾けられし高野海音僧正が御健在の時であつた。常福寺本の拾遺古德傳を拜見するため、どうしても井川定慶師の「法然上人傳全集」にだけ頼つていては、何か物足りなく、校合が正確でない憾みがあつたがために外ならない。此處では卷四の三部經釋を主とし、其の他法然上人の語と傳へられるものを校合したのであつたが、時に聖岡上人の消息やら法然上人の御像等、淨土宗史資料を見せて戴き、滞在中に聖岡上人が直牒を書かれたと傳承されている直牒洞に足を延ばして、在りし日の岡祖を偲び久慈川のほとりを石井博士と歩み、水戸城北

に佇んだのも、思ひ出の一つになつた。そして暮もおしつまつたうすら寒い日、湊善照寺に會て岡達音先生が手に入れられた貴觀書「古本漢語燈錄」を拜して校合した事もあつた。此本は眞宗の學匠惠空が、自から一字一句をゆるがせにせず、諸書で筆寫されたもので、拜見するだにも嚴正たりし老師の性格が迹り出ているような氣がし、自づと頭を下げさせるばかりであつた。其の老師は二部までも書寫して殘されたようで、手澤本を大谷大學で見たのは其の翌くる年の夏であつた。大谷大學には、此の外「異義集」等二三部、冊數にして十數部の所謂惠空書寫本が殘されているが、この全てを眼福することが出來、校合し得たのはせめてもの幸いであつた。

恐らくは法然上人全集の編纂という聖業をなさざるに至れば、此等夥しいばかりに多くの貴重な繪卷物や典籍にも眼もみえず、又めぐり合える期會も到底、私の一生には望まれなかつたであらうし、元祖上人の舊蹟をたずね、古いみ寺を淨土・眞宗の區別もなしに訪づれることもなかつたであらう。それが法然全集に、否法然上人に契りを得て、其の期會を得たということは千載一遇、誠に以て高恩の賜ものといふべきであらうか。關の東西を

問はず、私の足跡は法然上人を介してあまねく全國に及び、筑前に善導寺を訪づれ、鎌倉光明寺の寶庫に入り、眞似牛に元祖の壽像を仰いだ。嵯峨に二尊院の法然上人鷹塔を訪ねて、七箇條起請文を拜し、清涼寺に熊谷入道の消息を觀て、元祖のれ壑の跡を偲び、安居院西法寺に聖覺法印の舊蹟をめぐつて、室町期書寫の「登山狀」を拜したこともあつたが、玆で思い出されるものは、湖東本福寺のことである。堅田本福寺は既に蓮如時代から、堅田門徒の中心地として、上人の活動を助成すること多く、蓮如の教線にとつては忘れ得ない土地であり、多くの寶物を藏した湖東堅田の法城であつた。その寺が此春焼失したと報ぜられた時には、耳を疑い駭然とした。ああよい時に「二枚起請文」を拜覽することが出來たと思うと同時に、それは又やるせない思ひ出ともなつてしまつた。あの「二枚起請文」は果して健在であらうか。只そればかりが氣がかりでならない。

そればかりではない。旅の楽しさと云うこともあるが、疲さもある。確かそれは二十八年の夏のこと、雁多尾畑に眞宗光德寺を訪づれた時のことであつた。關西線の河内堅上驛に車をすて、左に右に葡萄畑の散在する山路

を登ること凡そ一里、殆んど部落らしい部落もない、何處か遠い山に來たという感じさえする山間の部落雁多尾畑は、金剛山に對した高い山の頂にあつた。かん／＼と照りつける太陽は、身も心もすがりに頭上によろしやもなく反射し、今日の水銀柱は三十八度線を越え、拭つても拭つても汗はとめどもなく出て来る始末。これも私に課せられた編集のための陣痛と心得て、やつと辿り着いた光徳寺で、室町中期のものと推定されている古寫本を、持つて行つた望月博士の全集によつて校合する。極めて多い校異に驚きもしたが、先生は何本に依つて收載したのであらうか。其の所據本を一寸書いて載いて下さつて居れば尙更好都合であらうに。流れ出る汗、兩者を交互に見やる眼、正座して聖教を拜見する膝の痛さ、最早や其れは自分乍らに超人的行爲としか思はれない。續いて翌くれば百萬遍知恩寺に大原問答聞書と平重衡と元祖上人の往復消息を拜したが、讀みづらい字の多いのには閉口した。百萬遍には元祖が示寂に臨んで筑紫の聖光房に宛てた消息とやらを見せていたゞいたが、此れ等も行の目的で書かねばならなかつたのであらうか。鑑西の正統を示すためというのが主目的であつたのであらうか。偽書は矢張り偽書の撰述された時代背景なり、その偽作事情を調らべ得て、始めて偽

書としての眞價がある筈である。

龍谷大學に大原談義聞書を求めたのは其れから間もない頃であり、又その翌くる年には元亨版和語燈錄を校合したものであつた。淨土宗では眞宗や日蓮宗のように、書誌學的研究は餘りなされていない。強いて言へば淨土宗のもつ書誌學的研究は選擇集位のもものではなかつたろうか。それが七百五十年遠忌を目標にひかえて、法然上人の遺文だけでも出來たといふことは、學界のため誠に慶賀にたえない所であると自負している。しかし書誌學的研究も未だ其の緒についたと云う現状で、此れをもとにして今後更に愈々書誌學的研究なり、思想史的研究が進捗されなければならぬ。その點では本書は氷山の一角にしかすぎないのである。

斯くして稿成つた原稿は四千五百枚、時に脚註が本文以上にも及ぶことが屢々で、これ又印刷屋泣かせとなつた。さて原稿が出來ても、印刷所はおいそれとは引き受けてくれない。以前國漢の辭典を扱つた印刷所が、字母がそろつてゐるからとの事で引き受けてくれたとは云うものの、何や彼れやと注文をつけ、校正の出方がおそいと云つては文句を云つて來るが、校正子は又原書に當つて校正するので、そんなに早く出來るものではない。印刷所は成可く早く校了にしたいと云うが、此方

の身になれば、何時の日にか再び編集されるであらう全集を、昭和の日に成つた法然上人の遺文集が杜撰であつたという譏りを受けなためにも慎重を期さなければならぬ。それが出版延引の動機ともなつたのであるが、忠實に正確にやらうとしたればこそ、印刷にとりかかつてより一年有餘ヶ月と云う長い期間を要したのであつた。

しかしともあれ、數々の楽しい、又苦しい思い出を残して法然上人全集は昭和新修と銘ゝつて、石井博士と私との共編の形で日の目を見ることが出來た。嗚呼長い年月であつた。だが本書の出版を見て、元祖法然上人の七百五十年の御遠忌にいさゝかでも隨喜し得たことの喜びは、千二百十六頁に及ぶ大著によつて私の元祖研究も一エポックをきずきあげるものが出來たのである。

私がこのように全集の出づる喜びを述べても、私にこのような喜びを得る機會を與えて下されたのは石井教道博士であつた。先生も又、全集の出版に當つては高田專修寺やその他の諸大寺、諸大學に足を運んで、親しく淨書し、嚴密な校正を施され、昭和新修の名にはじないようにと努力された。いわば私は、先生のお仕事に助力したというにすぎない。今後共、恩師石井先生が鶴齡をまされ、健康に留意され、宗學の木鐸として精進されんことを祈りつつ筆をおく。

佛 教
童 話

木魚ポクポク

森 正 義

山の奥の、その奥の、そのまた奥の、その奥に、小さなお寺がありました。そのお寺には、白いひげを生やした、目の細くてやさしい年をとつた、おしろうさんが、たつた一人で、くらしていました。

春には、櫻や桃が、きれいに咲くし、秋になると、もみじや、ならの木の葉が、赤や黄色に色ついて、それはそれは、きれいでした。それに、とても、けだかいお顔の、あみだ様が、おまつりしてありましたので、春や秋には、こんな山寺にも、時々、おまい

りの人が、ありました。その人たちは、小さな木魚を、本堂に置いて歸りました。だから

小さな、お堂には、ふにあいなくらい、たくさんのお木魚が、置いてありました。山の木の葉が、一枚々々落ちて、はだかになる頃から、だんぐと、おまいりの人は、來なくなり、チラ／＼雪が降り出す頃には、だれ一人登つて來なくなつてしまいます。おしろうさん

は、たつた一人ぼつちではありましたが、いつも、みほとけさまと、いつしよだから、ちつとも、さびしいとは、思いませんでした

一月一日の朝早くから、おしろうさんは、

松竹梅の、お花を、みほとけさまに、ささげて、一人でついた、つぶつぶの一ぱい出た、もちを、おそなえすると、古い本堂の中も急に、パ／＼と、明るい光りが、さしこんで來たように、思えるのでした。

「あー ありがたい。ありがたい。みほとけさまのおかげで、たつしやで、新しい年を、むかえさせて、いたゞきました。なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。」

あみださまの前で、何べんも、お禮をして
おつとめを、はじめました。

「ボクボクボク」

いつしようにけんめいに、お念佛を申してお
りますと、おしろうさんは、ふと、ふしぎな
音が、ラレろの方から聞えてくるのに気がつ
きました。

「ボクボクボク」

と、ちがつた、木魚の音が聞えてくるので
す。

「こんな雪の朝に、だれだろう。おさんば
あさんかな。ごんべえさんかな。元旦から、
おまいりとは、感心なお人じゃ。なむあみだ
ぶつ、なむあみだぶつ。」

と、つゞけて、お念佛を申して居りまし
た。すると、また、ラレろの方から新しい木
魚の音が、

「ボコンボコンボコン」

と、聞えて來ます。

「あれつ！ また新しいお人が、おまいり
じゃ。なむあみだぶつ なむあみだぶつ。」

お念佛を、つゞけていると、また新しい木
魚の音が

「ボコリボコリボコリ」

「あれつ！ また、だれか來たぞ。なむあ
みだぶつ なむあみだぶつ。それにしても、
ちつとも、お念佛を申さないぞ。いや／＼寒
いからじやろう。そうだ火鉢を入れて、あた
ゝめてあげましょう。」

おしろうさんは、やつと、ふりむきまし
た。ふりむいて見て、びつくりぎようてん。
おしろうさんの、ラレろには、大きな、さる
を、まんなかにして、小さなさるが、兩はし
に、ちよこんと、すわつて

「ボクボコンボコリ・ボクボコンボコリ
ボクボコンボコリ」

と、木魚を、たゞいっているでは、ありませ
んか。

「やー。おさるさんも、おまいりかい。よう
この冷い雪の中を、おまいりしたなー。」

おしろうさんは、子さるの、せなかに、ま
だ残っている、こな雪を、やさしく、はらつ
てやりながら、申しました。

そうして、みほとけさまに、おそなえして
ある、おもちを一つづゝ、おさるの手のひら
に、のせてやりました。おさるは、うれしそ
うに

「キャッ キャッ キャッ」

と、云いながら、なんべんも、なんべんも
頭をさげました。

おしろうさんは、また、みほとけさまの前
に、すわつて、

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

と、お念佛を、つゞけました。おさるさん
たちは、また

「ボクボコンボコリ」

と、木魚を、たゞき出しました。

佛教入門（その四）



生存の構造（二）

佐藤 密雄

（一）有爲法

佛教では、物質（色法）と精神（心法と心所法）との材料だけで此生存が成り立つて居るとは見ないのである。物質や精神が結合して、生長し老衰し行く、生存の變化の爲めの法があるとしてのであるが、それを不相應行法と言ふのである。不相應行法と言ふのに、得・非得・同分・命根・無想果・無想定・滅盡定・生・住・異・滅・名句・文の十四法を數へる。

此の十四の中、先づ得と言ふ法であるが、自分の肉體と精神が一つになつて一人格を構成するのは、得（結合）

の原理があるからであるとされる。人間が攝生や修養に依つて、身心の上に健康とか知識とか人格とかについて増益するものゝあるのも得の原理があるからである。此様に人間の身心の上に肉體的にも精神的にも、努力に依つて増益のあることを可能にするもの、即ち努力や修養の意義を可能にするものとして、此を一つの法と見て得と言ふのである。第二の非得とは、今の得が逆のことであると考えれば大體間違はない。第三に同分とあるが、此は人間の人間性、犬の犬性の様なものであつて、人間が人間であるのは人同分があるからであり犬が犬であるのも犬同分があるからである。人間をして人間たらしめ

犬をして犬たらしめるものであるが、同時に論理學上の類とか種とかの概念をも有するもので、人同分は人類概念で、その中で日本人同分は人類中の日本人の概念に相當する。第四の命根とは常識的に「壽命がある」と言ふ時の壽命に相當するもので美魂ではない。第五から第七迄の無相果と無想定と滅盡定との三は、印度で考へられて居る一種の冥想状態で、仙人的修業をすれば、一時的又は相當の期間を此の身心から脱し、無想無心な状態を享受し得ると考へられて居たのであるが、此の三法はその状態を言ふので、あつて通常人の生存に關係の少ないものである。

第八から第十一迄の生・住・異・滅の四法は、此を肉體の生存の上について言へば、生・考・病・死と言ふに等しいものである。諸行無常と言はれる様にすべての存在は生じて住したと思へば直ちに(異)變して滅するが、此は人間の生存現象のすべてに、此四法が働いてかく生滅變化せしめるのであるとするのである。故に此の生・住・異・滅の四法は無常な人間の生存をして無常ならしめて居る四つの法である。最後に名・句・文とは人間の言語現象を成立せしめる三つの法である。人間の生存が犬や猫とは違つて居るのは言語を有して、意見を交換して社會を結成することになり、又人間共同して文化を築

くことが出来るからである。故に人間的生存の最も特徴的な現象は言語現象であると言へるが、此の現象をあらしめるのが名と句と文である。名は音のこと、句は文句のこと文は品詞のことであるが、言語を生る三要素から成るとするのは印度古代の考へ方に基づくのであるが、此處では人生現象に、言語現象を特徴的なものとして數へる佛教の考へ方を重視すべきである。

既に述べた様に、佛教では人間的生存を構成するものとして、物的要素(色法十一)と精神的な要素(心法一と心所法四十六)と上げ、更に、此兩者の外に、兩者が結合して生存現象を生起し相續するに必要なものとして今述べた十四法を不相應法と名づけて數へて居るある。色法や心・心所法は此を生存を構成する物的と心的との質的資料と見るならば、十四法の不想法は力的資料又は原理的資料とも見るべきものである。

以上で色法から初めて不相應法迄で、四種七十二の法を數へたのであるが、此だけの法が結合して各人の生存が成立して居る。此の七十二法で、人間的生存の現象のすべてを生起するに必要な法を盡して居ると見るのである。其處で、此七十二法を有爲法と言ふのである。有爲なる生存を成立せしめる資料的法の意味である。

有爲とは一般に有爲な青年等と用ひられる場合の有爲

でなく、いろは歌に「うえの奥山」とある時の「うえ」と讀む有爲で、諸行無常な生存の状態を言ふのである。そして其の様な有爲な生存を構成する材料となるものであるから有爲法と言ふのである。

(一) 無爲法

今まで、有爲法と言はれる七十二法を述べたのであるが、此に對して無爲法と言ふのが三つある。有爲法は生死する生存の成立に参加する法で、言はゞ存在の「有」とか「生起」とかに役立つものであつたが、此に反對なのが無爲法で、虚空無爲と非擇滅無爲と擇滅無爲との三法を數へる。

第一の虚空無爲とは、有爲法が有爲の生存現象を現する場所的な概念である。物と物との間の空間でなく、物の中も外もすべてを通じて考へられるものである。有爲法から成立する有爲の現象は、一つの現象の生じて居る時には、他の現象が同時同處に起り難いのである。即ち是れある爲めに他をあらしめないものが有爲法である。然し虚空無爲とは、此れある故に、其處に如何なる有爲法でもあらしめるもの、更に進んで言へば、此れなくしては如何なる有爲法も、有爲なる生存も成立しないものである。言はゞ、有爲法あらしむる無爲法である。

第二の非擇滅無爲とは、現象不生起の法の一つであつて、緣欠不生と言はれるものである。例へば、目で物を見て居た爲に、吉報を耳にすることが出来なかつたのは吉報を耳にする原因の一部が欠けて不生に終つたのである。此の様に、生すべきある事柄の原因の一部の欠如で、自然に其事柄の不生起に終つたこと、即ち生じなかつたことを非擇滅無爲と言ふのである。擇滅とは、例へば生死流轉する生存を生起せしめない爲めに、その原因を選擇して滅することに依つて、生死流轉の生存の不生起の結果を得んとするものであるが、非擇滅はその様な人爲をからずして、自然に原因の一部の失はるゝことから、生すべきものが不生起となつたことを言ふのである。

第三の擇滅無爲とは、佛教の生死解脱のこと、流轉の生存の滅すること、即ち涅槃のことである。生死流轉する生存は、既に述べた様に、七十二の有爲法が結集して生じて居るものである。此の七十二の有爲法の結集力となるものは、煩惱心や惡心でなした行業の業力である。其處で、佛教的叡知を得て、此の業力を發生する原因となる心情を擇び滅すれば、業力は生ぜず従つて流轉の生存は不生起となるのである。現在の生存は、前世の業力が七十二の有爲法を結集して成立したもので、此に次ぐ

來世の生存を結集するのは、現在世で今行する業の業力である。其處で今ま修養し叡智を以て來世を結集する業力を生ずるような心情を起さないことが、生死流轉に休止符を打つ最も可能で確實な仕方である。そして此仕方ですら生死流轉の滅が擇滅無爲と言はれるのである。

先きに述べた七十二の有爲法と今述べた三つの無爲法とを合して、五位七十五法と言ふのである、其處で、此の七十五法を分析する説き方の佛教では、七十二の有爲法からなる生死流轉の生存を滅して、三つの無爲法の世界へ進ませようとする實踐原理に立つものである。三つ無爲法の世界で、實踐的に可能なのは擇滅無爲法であるから、其の意味では、擇滅無爲を得る爲めの實踐哲學であるとも言へる。

(三) 業と生存

佛教は生死を解脱する教へである。勿論、ユダヤ教にしてもキリスト教にしても、神がら蒙つた人間の原罪への罰は生死である。だから、生死解脱は、人類が人間に生死あることを知つて以來のすべての宗教の悲願であらう。そして、インド教でも佛教でも、現在の生存の解消の上に、永遠の靜を見、それに生死なき生を感じやうとする。此様なことは、恐らく印度教や佛教の、所謂アリ

アンの宗教の行はれた地帯の特徴かも知れない。中國人でも日本人でも、自然の悠久さを愛すること至大であり例へば日本の茶道の様なものはその典型である。

其處で、今述べやうとする業は、解脱すべき生死の世界の維持者である。何んとしても生死を重ねたい人は業をなさねばならないし、死を欲しても死を實現出来ないのを、業がつきないとも言はれる。

業と言ふ文字は元來は作業や工業の業と同じ意味の業で、作ることを意味するが、此處では其の中でも特に、生存の意欲に基づいた人間の道德上の善又は惡の行爲だけを意味するのである。勿論あらゆる人間の行爲は業であるが、例へば水を呑むとか、食事をするとか、職業上の行動とか、其他道德的な意味のない行爲は無記業と言つて、生存の相續にかゝる業として取り上げないのである。元來業の考へは、古來すべての民族にある善惡應報の觀念に基づいて成立したものである。たとへ、現世に於ては惡事をなしたものがかへつて幸福を得ると言ふ不順な現象が見られるとしても、其は一時的な、浮雲の如きもので、生死を重ねて現はれる信賞必罰的な善惡應報は嚴として亂れないとすることを基礎づけるものが此の業論である。従つて、問題は道德的な善業と惡業とについてのみあるのである。

業は道德的に善と惡との人間行爲のことであるが、たゞその行爲だけを言ふのではない。善又は惡の行爲にはそれをなした人の生存に、その行爲の善惡の程度に應じた幸福（樂）か不幸（苦）かの應報がなくてはならないのである。其處で、例へば溺れる人を助けたと言ふ善業は、助けた行爲と俱に、行爲を行じたと言ふことが、來世に長命を得る要因となつて生ずる。謂はゞ業力とも言ふべきものである。そして此業力とも言ふべきものが、其の行爲に對する應報、例へば來世の生存が結成さるゝ際に長命を得ると言ふ効果をその生存の上に發生する迄存続するのである。故に、業とは、業の行爲と此の行爲の結果である業力とを合せて意味するものである。

人が死する時、即ち生存が解消する時には、此を組成して居る七十二の有爲法は、その結合を解くから、今迄の生存は全く消え去つてもふのである。然し、その時にその生存が生涯になした善や惡の業力が、新生存の結成力となつて、新たに七十二の有爲法を結集して新生存を組成するのである。そして、その組成された新生存はその結成力となつた業力を生じた善惡業に應報した幸福（樂）か又は不幸（苦）な状態の生存として果報するのである。今世に生物の命を取つたものは來世に短命と信ぜられ、亦今世に他に施すこと大なるものは來世に富貴を得ると考へられて居るのは、此の様な應報の道理を具體化した考へである。

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのまつトで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松宮・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
木 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費（都内横濱 500 圓以内
其他 1000 圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）

組立説明書送付

篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東 3 分)

(四) 業感の世界

人間的生存は今述べた様な意味で善惡業感の世界にあるものとせられる。前世の業の善惡で現世の苦(不幸)樂(不幸)の生存を受け、更に同じく現世の業の善惡が來世に幸不幸を感じ得せしめるからである。そして、生死輪廻とは、此の様に前世の業で後世を感ずることを繰返すことを言ふのである。人は生きる爲めには生活業をなさねばならないし、善惡の入交る人間的生存を生きる爲めには、必然的に善惡の行爲をなさざるを得ざるのである。即ち、業をなさざるを得ずして業をなし、生死を繰返さざるを得ずして繰返すのである。此處に、生きるものゝ無限の過去から永遠の未來へ、生死の苦を荷負ひつゞける必然性がある。此の苦の連鎖を斷切るには、佛陀の教智を發して、無漏業と言はれる應報的業力を伴はない生活業をなすに至るか、阿彌陀佛の淨土の様な所に到つて、業の支配を脱した生活に入るより外はないのである。勿論佛教は、此の生死相續の業感の世界を脱せんとするものであるが、佛智を得て業力を生じない無漏業の生活に入るのが、所謂自力聖道門で、淨土に生じて業の支配を脱するのが他力淨土門で、佛教の二つの道とせられるものである。

業感の世界は生死の世界で、生死は解脱すべきものであるが、生存を業感の世界として捉へること自體にも、亦た意味深いものがある。佛教では因是善惡果は無記と言ふ言葉がある。此は原因としての行爲は道德上の善惡

のいづれかであるが、その應報としての果報は苦樂いづれであつても、善惡の意味はないと言ふのである。

惡事をなしてろうごくにつながられて苦役して居る人があるとする。苦役を受けるに至らしめた惡事は道德的に惡とせねばならず、その罰として應報的に苦役を受けたのである。然し、苦役も苦役する状態も、惡の應報としての苦であつても、最早惡ではない。惡の罰としての不幸は不幸で惡とは言へない。善心で、應報としての苦役を精進して居れば、その人は善人である。善因善果惡因惡果と言はれるが、若し此を善から善が結果し、惡から惡が生ずるとすれば、善人は永遠に善人であり、又惡人は永久に善に轉じないことになる。其處で佛教では、善因樂果惡因苦果とするのである。不幸(苦)は惡ではない。不幸の中で善心に行すれば善業である。明日の幸福が約束されるのである。

業感の世界は、宿命的世界ではない。昨日の惡で今日不幸であつても、不幸の今日直ちに善業をなし、明日の幸福を期する世界である。又昨日の惡人が今日不幸であつても、今日は惡人ではない。その不幸から立直らせるには即今直ちに善心を振起せしむべきである。今日は昨日の果でありつゝ、明日を作りつゝある因であることを教へるのである。佛教は、生死を必ずしも五十年の生涯に於て見るのではない。一日一日に生死を見、一刻一刻に生死を見、生涯を感ずるべきである。今日の今の努力は明日の次の幸福を産むのである。一刻々々を、次の一刻々々をより幸福に築く努力の場と感ぜしむるものである。

後記

○新年おめでとうございます。澤土も皆様のおかげで、しだいに發展して参ります。いつも、本誌を培うふかい根があり、細根があつて、何かにつけ、それらが、生命を吹きこんでくれるのを痛感します。有難い事だと思います。本年もよろしく願ひします。

○昨年は、共存の聲しきりで、戦争に懼れる世界大衆を、ほつとさせました。或る意味では暴力の相互交渉というより、思想國是の對立化に重點が移つたといえましょう。國內的にも影響している。思想と思想との對立相剋、それは、むしろ歓迎すべきである。そして、もみにもんで、人類が切磋される。

○本月は御忌である。此間、藤井實應師にお會ひした時、大日比三師全集付録の「上人常に仰せられる言葉」の解説を探しておられる由承わつた。拜借できる方は、編輯部まで御一報下さい。

○本誌に御盡力下された新保義道氏は、一月十三日、ハワイ開教使として、鹿島立ちされる。御健康を祈る。(眞野龍海)

○一年は三百六十五日、人生百年とすると三萬六千餘日、五十とすればたつた一萬八千餘日、月にすれば六百ヶ月・時間にすれば四十三萬二千時間餘、ケチな古家でも何十萬といういまの數字下落に比して考えてみるといふ。街を歩いてみる。人々は千年も萬年も生きるようなつもりでいるらしい。たつた四十二三萬時間しか生きない人間だのに。なぜ人々は怨み憎しみあうのだろうか。どうして人は痛み苦しめあわずに、愛しあい助けあえないのだろうか。この自分が死ぬのに。(他人のことではない)これは悲觀ではない。こゝろから本當の生き方が解けてくるように思われる。

○新しい年を迎えて編輯子一同のぼる太陽の如く胸は希望に躍動しています。果してケイサン通りにいくだろうか。會員皆様の變らぬ御助成を念じつ。(宮林)

○本誌の編輯にたずさはつて初めての正月を迎えた、年の初めはうれしものらしい。なぜだろうか、過去への悔いや不満から来る未來への希望の現れであり「何かよい事ある如し」と云う未來への夢ではである。

○編輯子が先年の十月號後記でぼやいた一つに表紙の繪の事があつた。色々な約束をしながら遅々として實らなかつたが、今度青龍社は川端龍子門下の重鎮結城天童畫伯の筆でかざる事が出来た。畫伯の御好意に感謝する。今後は四季ごとに畫を變へて、特輯的編輯と共に本誌に新しい一つのエポックを打ち出したいと思つてゐる。

(水谷)

○新しい年を迎えた。街の姿にも人々の聲にも、一夜あければこんなにもゆつたりとした、落着いた氣持に變るものかと思われる。昨日までの、編輯のいたらなさや失敗も、すべて過去のものとなつて、今年への土臺となつていつた。新年の斬新な氣分を追つて、これからの仕事に勵んでゆきたい。

○須藤隆仙、大橋俊雄兩氏の發起で、このたび教學研究發表機關紙「解信」が發刊された。本誌發行の苦しさを身にしみて感じていただけに、なか／＼御苦勞が多いことと思われる。隔月發行、五十圓(送共)、一年三百圓、函館市船見町稱名寺須藤隆仙氏方「解信」發行會。(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 正月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年十二月廿五日印刷
昭和三十一年一月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信 常
發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八二
發行所 法然上人續仰會

振替 東京八二一八七番

年 新 賀 謹

增上寺法主 大正大學長	檀林傳通院住職 淑德學園理事長	岩手大迫 到岸寺	大本山光明寺	相福寺住職 明照幼稚園長	寶心寺住職 淨土宗議會議員	淨運寺住職 淨土宗議會議員	泉谷寺住職 小机幼稚園長
椎尾辨匡	大河內隆弘	昆野秀賢	大野法道	杉田義俊	丸地辨信	宮島了道	久米法學
「解信」刊行	常照院住職 淨土宗議會議員	橫濱大光院	大本山增上寺 布教師常任理事	長安寺住職 橫須賀市議會議員	魚籃寺住職	東京保育學校	龍安寺住職 川崎市議會議員
須藤隆仙	野村宗春	宮林大廉	山田鏡瑞	玉木辨戒	山田巖雄	內山憲尙	水谷辨知
大頂寺住職 靜岡大學教授	大正大學教授 文學博士	大正大學教授	大正大學教授	大正大學教授	淨土宗教學部長	淨土宗教學部主事	光專寺住職
石井眞峯	眞野正順	佐藤賢順	佐藤密雄	佐藤良智	渡邊眞海	藤木隨教	服部辨稚

正本堂佛具店
電話深川(64)五八四八